

【学生による ESD 活動支援】

春日山原始林をフィールドとした ESD 実践 活動報告書

国語教育専修 3 回生 西條秀哉

1. 企画名 「第 28 回 春日山原始林観察会 夏の森できのこをみつけよう！」
2. 日時 2020 年 7 月 4 日（土）10 時～12 時
3. 場所 春日山原始林
4. 講師 京都大学フィールド科学教育研究センター・特定助教 赤石 大輔 氏
5. 参加学生 国語教育専修 3 回生 西條 秀哉
教育学専修 2 回生 岩城 雄大
6. 概要 夏の春日山原始林でキノコの観察を楽しみつつ、春日山照葉樹林の現状について知る機会を提供する

7. 活動を通じた学び

本活動を通して、以下の 3 点の学びが挙げられる。1 点目にきのこの種類について、2 点目にきのこと春日山原始林の関係について、3 点目に春日山原始林の現状についてである。

1 点目のきのこの種類に関しては、具体的にハラタケ目、イグチ目、ベニタケ目の 3 種類に大きく分けることができる。それぞれ外見や触り心地に違いがあり、特徴さえわかればおおかたどの分類のきのこのかを判断することができた。きのこにも様々な種類があるということは知っていたが、今回のフィールドワークにて、その分類分けがより細かくなった。まだ、理科の授業にて応用できるイメージは想定することができていない。しかし、小中学校で行う遠足や課外活動にて児童生徒や教員がきのこを見つける機会に、その作りや分類分けを教えることができれば、児童生徒とのコミュニケーションのきっかけにつながったり、きのこの話題を通じてその遠足や課外活動での興味関心を高め積極的な参加を促したりすることができるのではないかと考える。

2 点目のきのこと春日山原始林の関係については、春日山原始林の特質に大きく関係している。春日山原始林は世界文化遺産に指定されているので、研究目的以外での採取が禁止されている。だからこそ、他の地域の森とは違った特殊な植生環境になっており、きのこに関しても様々な種類が 2 時間だけでも発見することができた。また、きのこは春日山原始林に生息する多くの生き物の食料にもなっているということを知ることができた。きのこ自体毒がある種類もあるので、毒があるか否かを見分けられる人間しか好んで食べないのかと考えていたが、鹿や昆虫、ナメクジやリスなど沢山の生き物がきのこを食べて生きているということを知ることができた。また、きのこが大きな木の近くで栄養を吸収し、暗くて光合成のできない背の低い植物がきのこから栄養をもらうという植物ときのこの関係も学ぶことができた。きのこには、動物にも植物にも恩恵のある働きがあるということが今回のフィールドワークで学んだ最も大きな学びだと思う。

3 点目の春日山原始林の現状については、きのこを探しているときに気づいた。歩道から川にかけて土や植物が生い茂っている坂の部分に、コケや植物がなく、山肌が見えてしまっていた。これにより、きのこは見つけやすくなって本活動中は都合がよかったが、実際はかなり深刻な問題だと話を聞くことができた。坂の部分の植物やコケを鹿が食べてしまうことで、土肌が出てきて雨によって川に流されてしまったり、鹿が食べない植物がそこに生えてしまい、春日山原始林の植生環境が変わってしまったりとこれから先持続不可能な状況に陥ってしまう予兆だと感じた。

上記のように、今回のフィールドワークで、改めて森に生息する生物がそれぞれ自分と他の種とでお互いに関わりあって生きているということを知ることができた。